



逃げずに踏みとどまり，見届ける

原田 和俊

東京医科大学皮膚科学分野主任教授

当科の脱毛外来のチーフであるI先生は、いつも生き生きと脱毛患者さんの診療を行っている。一方、私は脱毛外来を担当して6年になるが、いまだにポジティブな気持ちで脱毛外来に臨むことができないことが多い。

皮膚疾患は根本的な治療法がなく、皮疹や瘙痒など、症状をコントロールしていくものが多い。しかし、ここ数年で乾癬やアトピー性皮膚炎、難治性蕁麻疹などに対する治療法にブレイクスルーがおこった。生物学的製剤の投与により、劇的に皮疹が改善され、これまで病状に苦しんでいた患者さんと、治療に難渋していた皮膚科医が喜びを分かち合える場面が増えてきた。

一方、円形脱毛症の治療はどうだろうか。標準療法といえるものはステロイド投与か接触皮膚炎を惹起させる免疫療法のみである。円形脱毛症のガイドラインでも推奨度が「A」の治療法はなく、「B」にランクされる治療法が数種類あるだけである。

脱毛症の経過中に急激に毛髪が再生し、患者さんからお礼をいわれることもある。しかし、そのような症例は自然に病勢が治っただけであり、私が適切な治療を行ったために発毛したわけではないことは確かだ。患者さんからの感謝の言葉に戸惑ってしまう。

少し穿ったいい方であるが、治らない症例は何をやっても発毛しない、治る症例はとくに加療せずに経過観察していくだけでも治っていく。ときどき、

自分が担当している脱毛外来に存在意義はあるのか？と、自問することもある。

脱毛患者さんの苦悩は計り知れないほど大きい。蒸し暑い夏季にウィッグをつけなければならない不快感、脱毛斑が縮小したと思ったところ、別の場所に新たな病変が出現したときのやり切れなさ、脱毛のために、ヘアスタイルを変えられない辛さなど。これらの苦悩にどう対処するのか？ その回答を私はもっていない。

脱毛外来で同じ処方を繰り返す、脱毛斑にステロイドの注射を行う、ただそれだけでも、私の担当する外来を継続的に受診してくれる患者さんがいる。そして、少ないながら、外来のあと、少し表情が明るくなって、帰っていく患者さんもいる。ありがたいことである。

「逃げずに踏みとどまり，見届ける」。帚木蓬生の小説『終診』の中で出会った言葉である。この小説の主人公である内科開業医は、この言葉通り、自分で治療できる疾患は最後まで患者さんを見放さず、診療を続けた。

私はすべての脱毛患者さんに対し、発毛させる術をもたない。それでも、患者さんが私の脱毛外来を受診してくれるかぎり、これからも、脱毛患者さんから逃げずに踏みとどまり，見届けようと思う。